

# 児童館に無料塾

ここにいるよ  
沖縄子どもの貧困

第3部 学力支援 <1>

午後6時の浦添市立森の子児童センター。遊び疲れて帰宅する小学生と入れ替わるように、地域の中学生が自転車に乗ったり、バスケットボールを抱えたりしながら集まってくる。

「きょう学校とんだったー?」大城喜江子館長(61)が一人一人に声を掛ける。「何もなし」「すつと寝てたから分からん」。愛想のない返答も多いが、中には「聞いて聞いて」「マジでかついであったって」とその日の出来事をお話し始める子もいる。幼いころから通い慣れた児童館の空気が、よく知った職員顔ぶれに子どもの表情が和らぐ。学校で居場所のない子、生徒指導の対象になる子も多い。家庭で夕食が食べられない

## 夜の居場所 中学生に提供

い事情を抱えた子もいる。そ音で話せる数少ない大人だ。んな中学生にとつて18歳以下大城さんは「ヤンチャで誤解の誰でも無料で利用できる見られることも多いが、根っか童顔は、安心して過ごせる居場所になっていく。服装や素行、学校の成績で子どもの評価を下さない職員たちは、本



市無料塾で高校受験に向けて勉強する中学生。集中が切れ寝転ぶ子もいる(左)学習後、夕食を食べる中学生(右)調理室の隅でスマホ画面を見つめる中学生―浦添市勤理客・森の子児童センター

中3の生徒たちと話している、高校進学の意味がない子の多さに驚いた。「おれが高校行って、どうするの?」「行く意味ないやし」「将来の夢なんかない」。そんな答えが次々と返ってきた。

深夜に仲間同士で歩き、起床できず学校に行かないなど、昼夜逆転の生活をしているケースもあった。家庭に居場所がないことや寂しさ、学校での疎外感などが原因だった。

「このまま社会に放り出すわけにはいかない」。大城さんは夜の居場所をつくることを決め、昨年9月、学習支援のための無料塾を開講した。

「大人の本気をみせてやろうと、心に火がついた。大城さんは笑いながら振り返る。

浦添市勤理客の市立森の子児童センターが中学生の夜の居場所、無料塾をつくれた。家庭環境が整わない子どもたちの実情を放置できず、予算もないまま始めた自主事業だ。意欲をなくしていたり、何年もさかのぼった学習が必要だったり、講師の報酬が出せないなど課題も多い。子どもたちはいつどのように学習を諦めるのか。学校にできることは何か。学習支援の現場から貧困と学力を考える。

・田嶋正雄

26面に続く